

獅子舞（ムカデ獅子）と地域社会 —山形県西置賜地方・長井市にみる芸能文化—

菊地 和博

本稿では、山形県長井市をはじめ西置賜地方に広く伝承されている獅子舞（ムカデ獅子）の芸能を本題として取り上げた。この民俗芸能は山形県内ではほぼ置賜地方にしか分布しておらず、全国でも限られた地方にしかみられない。本稿において特に論述の視点としたのは、この芸能がどのように地域の生活に関わって伝承されてきたかという伝承構造の分析であり、また現在、この芸能文化は地域生活にどのように影響を与えているのかという今日的意義の考察である。本稿はこのような視点をもとに、獅子舞（ムカデ獅子）を地域民俗的側面から検討したものである。

はじめに

長井市を中心に西置賜地方に分布する獅子舞は、長い幕の中に10数人が入って体をくねるようにして舞う特殊なスタイルである。幕の下から何本もの足が動くさまがムカデに似ていることから、通称「ムカデ獅子」ともいわれる。ムカデ獅子=多人数獅子舞はいわゆる中国伝来の「獅子舞」の一種で、東日本では富山・石川・岐阜などに分布している。山形県内ではなぜか西置賜地方にのみ伝えられる特異な芸能である。例外的にこの地方に隣接する朝日町にも見られる。また、これらの獅子舞（ムカデ獅子）は多くはカシラが黒色なので、通称「黒獅子」ともいわれている。

現在、長井市内の獅子舞保存団体はおよそ40を数え、そのうち「子ども獅子」がおよそ13団体もある。同系統の獅子舞は白鷹町内におよそ37団体、飯豊町16団体、その他に川西町、小国町にも継承され、主として西置賜地方に「獅子舞（ムカデ獅子）文化圏」が形成されている。はたして地域とどのような関わり方をもって継承されてきたのがこの圏域の獅子芸能なのか、本稿ではそれを問題意識としている。

1、置賜地方および長井市

山形県南部に位置する置賜地方には山形県総人口の約20%にあたる人々が暮らして

いる。所属する市町村は、米沢市・南陽市・長井市・高島町・川西町・白鷹町・飯豊町・小国町である。この地方は中世はほぼ伊達氏の支配下にあったが、伊達政宗は豊臣秀吉から米沢城や本領を没収されて岩出山に移り、その後当地方は蒲生氏郷の領地となった。しかし、慶長3年には上杉景勝の所領に替わり、米沢城には重臣の直江兼続が入ってこの地方を支配した。のちに景勝は会津から米沢に入部して居城とし、陸奥国の伊達・信夫郡（現福島県北部）も所領とした。9代上杉治憲（鷹山）は質素儉約を旨とした藩政改革を断行した名君として知られている。置賜地方は上杉氏の米沢藩領地として明治維新まで存続した。代々の上杉氏の領国支配策は、今なお置賜地方の歴史・文化・産業に影響を与えている。

長井市は置賜地方のやや北西部に位置している。飯豊山を源流とする白川と朝日岳を源流とする野川が市内で合流し、現在の長井盆地を形成している。上杉藩が支配する江戸時代は、青苧栽培や養蚕業が奨励され、特に江戸時代後半は養蚕業が盛んとなった。最上川には宮船場と小出船場の2つが設けられ、藩内の特産品等の物資運搬の拠点として大いに栄え、問屋・商人たちが活躍した。

明治以降は西置賜郡に所属し、昭和29年の町村合併で現在の長井市が誕生した。人口はおよそ3万人で置賜地方では米沢市につぐ主要都市である。国の天然記念物に指定されている「久保の桜」や、白つつじ・あやめの公園もある美しい町として観光客も多い。長井市は獅子舞（ムカデ獅子）、シシ踊り、念仏踊りなどの民俗芸能も盛んで、毎年、市内の獅子舞（ムカデ獅子）を中心に他市町の獅子舞も加えて10数団体が出場する「黒獅子まつり」が盛大に開催されている。

2、獅子舞（ムカデ獅子）の起源と現況

長井市にある総宮神社の獅子舞（ムカデ獅子）は長井地方の代表格（または「本家筋」）であるといわれている。総宮神社には古くから獅子頭が伝わっており、そのカシラには「寛文11年9月19日改」の銘がみられる。当社の奉納の獅子舞として使用されたのであれば、寛文11年（1671）という江戸前期には獅子舞はすでに存在したことになる。

長井市平山地区の熊野神社にも同型の獅子頭があり、「安永9年 高橋小兵衛作」の銘が見られる。安永9年（1780）であるから江戸時代後期になる。同じく成田八幡神社の獅子頭は文化年間（1804～1817）の制作、歌丸八幡神社の獅子頭は天保11年（1840）とされる。獅子頭が各神社奉納の獅子舞として使用されたとすれば、長井地方では江戸時代を通じて同類型の獅子舞が舞われていたといえるであろう。なお、現飯豊町萩生の諏訪神社にも天明2年（1782）銘の獅子頭が存在する。以下に長井市内の代表的な2つの獅子舞（ムカデ獅子）を概観してみる。

(1)総宮神社の獅子舞（宮地区）

①由来

総宮神社の獅子舞（古くは「宮の獅子冠り」）は、毎年9月15日・16日総宮神社例大祭にて奉納されている。『長井郷一の宮總宮神社縁起』によれば、康平6年（1063）に源頼義が前九年の役の戦勝祝いに総宮神社（当時は「白鳥大明神」）の社殿を再建

したとき、兵士たちに獅子舞をさせたのが始まりとされている。それは伊勢直伝の獅子舞だったともいわれている(1)。しかし、史実として明確なことはわからない。先にも記したように、総宮神社の獅子頭は寛文11年（1671）に改められているので、江戸時代以前に獅子舞がすでに存在していたこともありえる。

総宮神社の獅子舞は平成13年長井市無形民俗文化財に指定された。獅子舞保存会は平成10年に結成されたばかりで新しいが、西置賜地方の数多い獅子舞（ムカデ獅子）の総本家的な立場にある。それぞれの獅子舞の起源を尋ねると「県社（総宮神社）から習った」との言葉が多く聞かれる。実際、川西町や小国町白子沢の獅子舞は明治時代になってから総宮神社または長井から伝えられたとされている。獅子舞の習いも、遠くは小国町白子沢や飯豊町手ノ子など多くの周辺団体が総宮神社に来ていたことが知られている。このようなことから、総宮神社の獅子舞は西置賜地方の各種獅子舞関連の行事では今でも中心的な役割をはたしている。

②舞の実際

総宮神社獅子舞の曲目・所作にはつぎのようなものがある。「神殿舞」「拝殿舞」「拝殿見返し」「神輿祓い」「お庭振り」「軒端振り」「裏祓い」「千鳥」「六方（六歩）」「御坂上り」「橋渡し」「境振り」「町切くぐり」「警護掛かり」「獅子止め破り」「見返し」「見渡し」「おみきとり」「鳥居くぐり」「道中振り」などである。

これらの舞は、獅子が神殿から出て拝殿の階段を降り、行く先を警戒しながら安全を確認し、拝殿を振り返りつつ進んでいく。階段を降り参道を進み鳥居や橋を通るときには警固の誘導で進む。このような経過で集落をめぐる道中に入り、氏子の家々を門付して祓い清めていく。また境界を清めて悪魔払いを行いながら進む。本来、獅子は御神輿の先払いとして道中を先導し、行く手を清める役目を持っていた。その途中で獅子は神輿に近づいて周辺を清め祓おうとするが警固が獅子の口元をつかんで前に戻そうとする。獅子はそれに抵抗して警固との力比べとなるが、結局獅子は押し戻されてしまう。

このようなことを道中繰り返しながら神社参道に戻って来る。ここでも清め祓い残しが気になる獅子はまだ戻ることを渋るが、それを阻もうとする警固と絡み合いもみ合いながら、ようやく参道に入っていく。くたびれた獅子はゆっくり石段を昇りながら右に10歩進んで拝殿を見上げ、振り返って右に10歩進む。この繰り返しを行い、やがて獅子は拝殿・神殿へと入る「お宮入り」となり終了する。以上のようにストーリー性に溢れており、じつに筋書きが明解な芸能の一つであるといつてよい。

なお、これらの舞は通称「ドデンケ」と「ダダンコダダンコ」という2曲ですべて行われている。

(2)小出の獅子舞（小出地区）

小出地区には白山神社と皇大神社がある。白山神社は延応元年（1239）に石川県白山ひめ神社から分霊したものとされ、大変古い歴史をもっている。皇大神社は伊勢神宮の社殿の一字を拝領して置賜一円の総鎮守となっている。獅子舞（ムカデ獅子）は五穀豊穰と無病息災を祈願して、9月14日・15日に白山神社と皇大神社の2つの神社の例大祭で行われてきた。

小出では大正6年に獅子連中が結成されて獅子舞が行われるようになったという。連中結成は周辺地域では最も古いとされている。ただし、白山神社の宝蔵には江戸時

代末期の獅子頭が保存されていることから、江戸時代から獅子舞は行われていたことが考えられる。平成15年長井市無形民俗文化財に指定されている。保存団体名は「小出獅子連」と称する。

獅子舞は古く氏子のみによって継承され、総宮神社と同じく社殿から出るとき入る時、特に階段の上り下りの厳粛な振り付けが見どころとなっている。また、獅子を境内に入れる時の警固役の姿は、他に見られない振り付けである。たとえば、獅子が入るのを拒んで警固を獅子幕で巻いて抵抗する場面では、警固はそこから逃れて持っている棒を頭上で振り回して獅子と対峙する。獅子は大きく口を開けて対決姿勢をあらわにする。この獅子と警固の攻防が注目される場所である。なお、この獅子舞には毛槍・奴行列がつくのも特徴である。

3、卯の花姫伝説と水の信仰

深い山中には山の神が住み、山から流れ出る河川やその近くの湖沼には竜神（または大蛇）が棲むという信仰は、伝説や民話のなかで古くから各地で聞かれることである。長井盆地を流れる野川は、まさにこの竜神が支配しているという伝承が受け継がれてきた。以下に記す内容はこの地方に古くから伝えられてきたものである(2)。

「前九年の役」にまつわる伝説として、安倍貞任の娘に「卯の花姫」がいたが、敵対する源義家の偽りに騙されて父貞任を失った。今また貞任の弟である宗任とともに、義家の軍勢に野川上流の三淵（野川峡谷）に追いつめられた。覚悟を決めた卯の花姫は、朝日・祝瓶の修験者たちが見守るなか、護衛の兵士とともについに断崖絶壁から身を投じた。そののち卯の花姫は龍神（大蛇）となって三淵の主となった。よって龍神（大蛇）の正体とは「卯の花姫」であるという。

のち、朝日・祝瓶の修験者数名が修行をしている際に紫雲に乗った一人の美女が現れ、当地は景勝の地なので修験道場を建てるようにとお告げして三淵の滝壺に消えていった。やがて三淵には卯の花姫を祀る神社（祠）が建てられそれを奥の院とし、その里宮として総宮神社が建立されたという。なお、三淵とは本来「身捨淵」の意だと伝えられる。

総宮神社の例大祭では奥の院である三淵から龍神を迎え入れる（前日の宵祭）という信仰があり、総宮神社の獅子舞は野川を下る時の龍神（大蛇）の姿であると考えられてきた。したがって、総宮神社の獅子のカシラは伝播した周辺集落の獅子頭とともに「蛇頭」といわれているのは龍（大蛇）を模したものであるからという。その形状は唐獅子系獅子舞の赤漆のカシラよりも平べったく面長であり、目が丸く飛び出ているのが特徴である。地元ではこれを「お水神様」ともいつてきたのはなるほどと思われる。（ただし、勸進代地区と白兔地区の獅子頭だけは唐獅子の形状である。）

野川の中・下流近くの成田の田んぼに石の祠がある。「化粧坂観音」といわれており元亀元年（1570）頃に水難を除くために建立されたという。総宮神社の祭礼では卯の花姫が龍神となって野川に雨を降らせ、川の流れに乗ってこの観音に立ち寄り化粧を整え、その後に総宮神社本殿に入るのだという伝説も残っている。

4、獅子舞（ムカデ獅子）と草相撲

(1)警固＝角力・力士

西村山地方の獅子舞（ムカデ獅子）には、警固（あるいは警護）という重要な役割がほぼ共通してある。獅子をなだめたり、時にはリードし、さらに獅子と力比べなどの競い合いを通して威風を發揮する。このような大切な役割を担うとともに、祭りにおける屈強な男性の象徴的存在としても注目を浴びる。体格とともに風格も伴わなければならない難しい役目とされてきた。

実際、長井市の獅子舞の警固は各神社で行われる草相撲の勝者である「大関」が務める慣習であり、警固（以前は「力士」）は神社から指名されていたという。神社の三役とは神主・氏子総代・警固（力士）だった時期がある。

獅子舞と相撲との関連を表すものとして、今も「角力」と称する役割が存在している。成田の若宮八幡神社獅子舞は警固ではなく「角力」といい、東五十川の生僧観音の獅子舞も「角力」と称している。また、白兎の葉山神社獅子舞には警固2人に「角力」、同じく勧進代の勧進代総宮神社獅子舞にも警固2人に「角力」が存在し、そのしこ名は「小桜」である。成田には「車牛」という江戸時代に実在した郷土の力士になぞらえた人物が今も付き添っている。五十川の蘊安神社獅子舞の警固は、代々「小柳」という江戸期の郷土力士（前頭）のしこ名を名乗っている。総宮神社獅子舞の警固も「宮川」という大関のしこ名を名乗っている。寺泉の五所神社獅子舞は警固（2人）と称しているものの、「村雲」「小荒美」のしこ名を持っている。いずれも警固や角力などが付ける化粧回しにこれらのしこ名が晴れがましく記されている。

置賜地方の事例として、白鷹町の広野・畔藤・浅立などの獅子舞には獅子の前に軍配を持った「行司」が存在し獅子舞集団を差配して歩く。また飯豊町の萩生諏訪神社の祭りでは、「呼び出し」が獅子舞の正警固と副警固に対して花相撲の開始を告げて土俵に上げ、実際に相撲を取らせ神前に奉納させる。そののち一般人の花相撲が始まる。正警固と副警固は「力士」であるからこそ行われる奉納相撲なのである。江戸時代は当地方では警固を「力士」と書いたというのが確認はしていない。

そもそも神社においては、神主と共に祭神を守る役割を担ったのが「角力」・「力士」だったということからすれば、やはり警固や角力という役割を伴っている当地の獅子舞は神社・鎮守の神と密接に関係して継承されてきたといえよう。これらの獅子舞の成り立ちが神社で行われた草相撲と深い関わりをもってきたことの一端を知ることができる。なお、上記内容の大部分は研究記録誌『おしっさま』によった(3)。

(2)津嶋神社の警固役決定戦

平成23年8月に長井市草岡の津嶋神社に伝わる獅子舞の警固（警護）が13年ぶりに交代した。それは男性たちの相撲トーナメント戦の結果にもとづく交代劇であった。神社境内で行われた6人による戦いは、現職の警固とそれに挑む青年との一騎打ちとなったが現職が敗北した。新しい警固は伝統のしこ名である第8代「鯉の短冊」を襲名した。津嶋神社に伝わる獅子舞の警固は、10数年に1回男性の相撲勝負により更新されてきた。

しかし、近年簡略化が進んで実際の相撲による警固交代は珍しくなったのが現状である。事例として、五十川地区の警固は6代目までは花相撲を行って決めていたよう

で勝者は土俵入りまで披露していたという。しかし、現在は親子代々が引き継ぐ襲名制度をとっており、襲名披露と称して名入れの盃を配って一戸ずつ回っているということである。現在は8代目が警固を継承している。

5、獅子舞（ムカデ獅子）と「ながい黒獅子まつり」

(1)概要

長井市中心街では、平成2年から近隣の市町村の各獅子舞（ムカデ獅子）団体を招聘して「ながい黒獅子まつり」が行われてきた。毎年およそ10数団体が出場してそれぞれ地域の個性的で勇壮な舞を披露し合っている。長井市五十川地区の獅子舞は、鎮守の神に対する奉納を目的とすることを厳守しているため他地区へは出ない。しかし、一方では「ながい黒獅子まつり」に参加できない若者は体験したがっていることも漏れ聞く。若者は晴れの舞台が長井市中心部で市内外の大勢の観客の前で舞うことに意欲を燃やしていることは想像に難くない。それだけ今や「ながい黒獅子まつり」は地域に根づく伝統芸能が集結する魅力ある祭礼としてその名が知られるようになっている。

(2)まつりの実際

①昼祭り

平成21年5月23日は第20回目の節目を迎えた記念すべき「まつり」であった。この年は「特別招待」として飯豊町の小白川神社獅子舞が招かれた。また「特別企画」<長井の心 伝統文化発表会>として長井小学校の「長井小黒獅子舞」、平野小学校の「平小獅子踊り」、豊田小学校の「少年少女河井獅子踊り」も昼祭りに参加している。例年がない企画がみられたが、「ながい黒獅子まつり」の概要を知るために、この年のおおよそのまつり内容を記してみる。

まず、昼祭りコースとして12時から13時頃にかけて獅子舞1団体が白つつじ公園、5団体が市役所西側からスタートして、約1時間30分をかけて柳橋、片田十字路を通過しながら商店街を練り歩き、ゴールの白つつじ公園を目指した。公園内では獅子舞団体の到着後に平小獅子踊りと少年少女河井獅子踊りが披露された。

②夜祭り

夜祭りは17時頃から11団体が長井駅前や中央十字路・十日町などをスタートし、商店街を舞い続けながら途中錦屋十字路を通過して最終的に白つつじ公園特設広場を目指す。10数人の若者が入った黒獅子は、龍（大蛇）が川を泳ぐ姿を連想させる波文様や水玉文様をあしらった長幕の胴体をくねらせ中心商店街を練り歩くさまは、荒々しさとともに神々しい雰囲気醸し出している。獅子の足取りは時折、小刻みで軽快に歩き回る。

獅子は門付して回りながら家々から差し出されたお神酒を大きな口の中に注ぎ込まれて飲み干す。その後は大きな口を開けて天を仰ぎ、ゆっくり下へ打ちおろすように歯を打ち鳴らす。いわゆる「歯打ち」である。そのたびにバコーン、バコーンと大きな音が街なかに響き渡る。獅子のあまりの形相や歯打ちの音の響きに泣き出す子どももたくさんいる。

時折、軌道をはみ出して観衆側へ近づこうとする獅子を警固がリードし、従おうとしない獅子は警固と力比べの一騎打ちで強引に押さえつけられる。この場面はじつに見応えがあり、観衆が手を叩いて両者を応援しながら最も興奮する場面である。観客からは「ガンバレ」と声援が飛ぶ。獅子周辺には太鼓と笛のお囃子集団が付き添い、獅子舞地域の女性を含む小中学生や若者が大勢参加して人だかりとなる。

③「お宮入り」

白つつじ公園広場の到着は、早い団体で18時過ぎ、遅い団体では21時近くになる。公園内には鳥居と「お宮」が特設されており、それを囲んで棧敷席が設けられている。観客はつぎつぎと到着する獅子舞団体を拍手で迎える。昼祭りの場合も同じであるが、獅子はすんなりと「お宮入り」を果さない。まだ悪魔払いは済んでおらず「お宮入り」はまだ早いとする獅子と、そろそろ「お宮」に導こうとする警固との間で力比べの激しい攻防戦が繰り広げられる。数分の激闘を終えて獅子はようやく警固に従って「お宮入り」となるのであるが、獅子と警固の力比べ・闘い方では団体ごとに違いがあってそれが一番の見どころでもある。例えば、手ノ子八幡神社の獅子舞は2人の警固が獅子の両足に警固棒を差し入れて足を浮かせながらようやく獅子を導くのである。この日は両者の攻防が街の路上や公園広場など多くの場面で展開されて喝采がおこる。

このまつりは、平成22年度に「ふるさとイベント大賞奨励賞」、まつり実行委員会が第15回地域づくり総務大臣表彰に輝いている。平成24年度でこのまつりは第28回目を終えている。

6、分析と考察

A、伝承構造の視点

(1)農業用水・生活水と獅子信仰

西の山間から流れ込む野川流域には豊かな水田が広がり、南北に流れる最上川との合流地点近くには長井市街地が形成されている。また野川は総宮神社後方すぐ近くを流れている。野川にまつわる伝説や信仰を生み出したものは、このような長井の人文・地理上の立地背景があるだろう。

野川は置賜地方きっての急流であり、宝暦7年（1757）や明和6年（1769）などの大洪水をもたらした暴れ川でもあったが、稲作農業や町場で生活を送る人々にとって水（川）は貴重なものであり、水への畏れと敬いの心情が複雑にからんでいたであろうことは想像に難くない。水の神として長井では田植え時期には特に蛇を大切にしている風習があり、「田の畦の蛇は殺して悪い」という言葉が残っている。また有力な家の米蔵に白い大蛇を飼って神として祀っていたなどの伝えもある。ここからも農業と水と大蛇（＝龍）の信仰関係が浮かび上がる。

『元置賜村反別』（文政11年～天保10年以前）によれば、野川から灌漑用水として取水する堰は、平山堰（木蓮堰）・九野本堰（荒川堰）・栃木堰・中村堰があった。それらの堰は寺泉・成田・五十川・中・時庭・萩生・上九野本・下九野本・平山・小出・宮・泉の村々の水田を潤していた⁽⁴⁾。なかでも平山堰（木蓮堰）は、平山・小出・宮3ヶ村の水田灌漑ばかりではなく飲用水としても利用され、さらに一般家庭の燃料用薪木となる野川の流木を小出村の薬師寺裏まで流し送るなど、幅広い役目を担って

いた。平山堰のみならず、野川から引いた水路・小河川は町場を網目状に東西に走っており、時には敷地内を流れて人々の生活水として利用された。まるで長井が水郷の町とでもいうべき景観を呈してきたことは注目すべきである。

江戸時代から続く野川に依存する水利事情と、水神でもある龍（大蛇）＝獅子信仰とは総宮神社を媒介として根強く連結しており、現在においても獅子舞芸能は長井固有の地域文化として特色ある位置を占めている。なお、総宮神社は古来水を司る神を祀る神社として名高い。

(2) 鎮守の神と獅子舞（ムカデ獅子）

長井市および周辺の獅子舞（ムカデ獅子）は、集落の鎮守の神が祀られる神社に奉納することを基本としている。先にも触れたが、長井市五十川地区の獅子舞は、鎮守の神である蘊安神社に奉納する地域文化であるから他地区へ出て演技をすることはできないという考えを堅持しており、「ながい黒獅子まつり」には一度も参加していない。

その善し悪しの価値判断はともかく、それほどの厳格さを持った集落も現に存在する。このことは、獅子舞が鎮守の神（集落によっては観音・地蔵・文殊などの仏）に対して、祈りと願い・感謝の気持ちをもって奉じる「神事」芸能の性格をもっていることを示している。

発生経緯を考えれば、長井市の獅子舞は念仏踊り・シシ踊り・田植踊りのようないわゆる民間型「風流（ふりゅう）」の芸能ではない一面をもっていたと考えられる。誤解を恐れずにいえば、中世寺社で行われた延年や田楽、神楽などがある種似通った側面をもつ芸能だったといえるかも知れない。

さらに、この地方の恐れ多い獅子をコントロールするのは、「猿田彦神」など祭りの先頭に立って案内役をする神ではなかった。それは各神社で行われた草相撲（角力）の代々のチャンピオン力士であった。このことは、獅子舞（ムカデ獅子）が一方では地域の民衆文化とともに歩んで継承されてきたことを示すものであろう。

(3) 「黒獅子」の歴史性の分析

① 太神楽系の赤色

伊勢派の伊勢太神楽と熱田派の江戸太神楽・水戸太神楽など唐獅子系の獅子舞は、そのカシラは赤色を基調としている⁽⁵⁾。ときには金色に輝く獅子頭もある。かつて山形県村山地方に本拠地を持っていた「丸一神楽」と称する各太神楽集団は熱田派太神楽であり、赤漆の照り輝く獅子頭を持って家々を門付け興行していた。伊勢派や熱田派などはおおよそ江戸時代に入ってから隆盛している。

長井周辺の蛇頭系獅子舞のカシラは黒漆で染め上げられているものが多くいわゆる「黒獅子」といわれる（例外は、白鷹町「鮎貝七五三獅子舞」）。黒色を基調とした獅子頭は、西日本に比較的多いとされる伎楽・舞楽系の獅子舞にも見られる⁽⁶⁾。代表例として大阪四天王寺舞楽や島根県隠岐国分寺蓮華会舞の獅子舞があげられる。一方、東北地方の場合は主として修験山伏が関わった獅子舞文化圏に見られるという特徴をもつ。先にあげた「卯の花姫伝説」の中にも朝日・祝瓶の山々で修行する修験者たちが登場しており、しばしばその影響力を思わせる場面が垣間みられる。

具体的事例をいくつかあげてみよう。岩手県の早池峰山系の山伏神楽の獅子舞、お

よび黒森山系の山伏神楽の獅子舞のカシラは黒色である。同じ山伏神楽系の芸能で秋田県と山形県に分布する番楽で舞われる獅子舞のカシラもほとんどが黒色である。青森県東通村の山伏神楽である能舞の獅子頭も同じことがいえる。これらは、中世から江戸時代まで修験山伏たちが芸能集団を構成して村々を門付興行して回った経緯をもつ獅子舞であった(7)。

②「権現様」の黒色

とりわけ岩手県の山伏神楽と青森県の能舞の獅子舞は「権現舞」といわれ、カシラを「権現様」と称して神のように崇められてきた。今でも床の間や祭壇には権現様のご神体のように鎮座しており、その前で人々は深く礼拝することを怠らない。「権現」とは紀州熊野を本山とする修験山伏が奉じた本地垂迹説における神号の一つである(8)。権現信仰は紀州熊野を本拠地としているが、東北地方では山伏神楽系芸能の獅子舞の広がりを通してその浸透ぶりをおおよそ把握することができる。中世以来、熊野系修験の影響を受けた山伏たちが獅子舞を中心とする各種芸能を演じて回ったといえる。「熊野の神」の現れとして獅子頭（権現様）は東北地方では芸能を通して重要な役割を担った(9)。

山形県内の事例として獅子頭が黒色を基調とするのは、鶴岡市青龍寺地区の六所神社が所蔵する6体の獅子頭がある。最古のものは正平6年（1351）の銘が見られ、その他は室町・桃山・江戸中期頃の製作と推定され、最新の獅子頭は昭和3年製作である。これらは山形県有形民俗文化財に指定されている貴重なものであるが、同社の獅子舞は現在も3月初旬に氏子の家々を門付けして回っている。この六所神社は中世から修験道の霊場であった金峯山の登拝口に鎮座しており、当獅子舞もなんらか修験の影響を受けたことが十分考えられる。

③熊野信仰とのかかわり

黒色の獅子頭は、平安初期の創建と伝えられる南陽市熊野大社の「獅子冠」と称する獅子舞にもみられる(10)。総宮神社の獅子舞も、江戸末期の獅子箱を見ると古くは熊野大社と同じく「宮の獅子冠」と称していたことがわかる。中世の奥羽には熊野信仰が濃密に入り込んでいた。たとえば南部に八溝山八槻の大善院、北部には持渡津先達の強大な熊野系修験寺院が勢力を持っていた。羽州山形ではそれほど大きな勢力はないものの、置賜地方では糠野目の最重寺聖越後阿闍梨頼賢・頼尊、長井に先達職をもつ一野田賀坊、下長井の大蔵先達などが存在した。なんといっても白鷹丘陵を取り巻く周辺に熊野信仰が集中している。南に宮内熊野神社、北の平塩、北目、伏熊、高屋に各熊野神社がある。このエリアには羽州山形における熊野信仰の一大勢力があったとされている(11)。庶民にも熊野神は「おくまんさま」として長く親しまれてきた。

長井市内には熊野神社は4社が存在し西置賜地域全体で14社という数字は八幡神社の16社に次いで多い。置賜地方における中世伊達氏については、11代持宗・12代成宗・14代種宗・15代晴宗が熊野参詣や熊野先達とのかかわりがあり、藩主たちに熊野信仰が篤かったことが伝えられている(12)。

④「歯打ち」の共通性

山伏神楽系の獅子舞と黒獅子系の獅子舞には「歯打ち」という共通性があることも取り上げなければならない。この背景にも熊野信仰が見え隠れする。いわゆる権現様と呼ばれる獅子は、まるで楽器のように上下の歯を打ち鳴らしてお囃子とりズムを同じくする場面がしばしばみられる。黒獅子系の獅子舞も祭りのときは「ご信心」の大

声とともに、「バコーン」「バコーン」「バコーン」とおよそ3回にわたり大きく「歯打ち」を行うのが常である。権現様のように小刻みに激しく打ち鳴らすことはないが、音を出すことにある種の意味づけをすることは同じである。

一方、太神楽系の獅子舞は人々の頭などを噛む所作をもって「悪魔払い」と称しているのを特色とするが、そのときはまったく歯を打ち鳴らさず、大きく口を開けた後は静かに口を閉ざす。ここに2つの系統の獅子舞の大きな違いが明確になる。

以上のことから、長井市を中心として西置賜方面に広がる獅子舞（ムカデ獅子）のカシラの黒色は、太神楽系獅子頭が基調とする赤色と発生由来に明確な違いがある。特に東北地方の場合は中世以来の修験の影響、なかでも熊野修験がその一因としてあったのではないかということを考えてみた。しかし、これまで述べたことを確かに裏付ける史料が不足しているので、なお今後の検討課題としておきたい。

B、今日的意義の視点

(1)地域一体感の醸成

長井市さらに西置賜地方では、各神社例祭と獅子舞（ムカデ獅子）奉納について、少なからぬ人々の参加・協力体制が実現されている。「お獅子さま」（おしっさま）ともいわれる獅子への崇敬の念をつうじて、演じる者と観客を含めて地区住民の一体感が醸成されている。獅子舞そのものが「ムカデ獅子」であるから多人数を必要とする。太鼓や笛などのお囃子や世話役も含めて、構成上ほぼ総参加型の芸能にならざるを得ない。獅子連という組織は各団体とも30人から40人以上で成り立っている。この地域共同体的祭礼はそうした背景をもって創出されている。集落の人々は獅子舞を演じることをきっかけに、神と人々がつながり合い共同体の一員として気持ちを一体化させようとするのであろう。その意味において神社（鎮守の神）は地域コミュニティーの精神的支柱の役割を果たしている。

(2)祭礼文化の創出と賑わい

各神社例祭で行われている獅子舞は、人間である警固と神（龍）である獅子がときに激しく対峙するシナリオやそれを演じる場が設定されており、祭りの見せ場づくりに一定の演出が行われている例が多い。見せ場では警固の屈強な男性としての魅力が発揮される。同時に「悪魔払い」を本領とする獅子がもつ「荒々しさ」の摩訶不思議な魅力もいかに発揮されるのである。エネルギッシュな祭りの醍醐味は、西置賜地方の獅子舞（ムカデ獅子）奉納がなされる神社例祭で味わえる。

このようななかで、毎年数10団体が一堂に集まって獅子芸能を披露し合っているのが「ながい黒獅子まつり」である。各団体が演じる人間（警固）と神獣（獅子）の対決・攻防は双方の駆け引きでもあり、この闘いを通して獅子の二面性、つまり「荒々しい獅子」と「悪魔払いの獅子」が浮き彫りとなる。これが西置賜地方の黒色蛇頭系の獅子舞（ムカデ獅子）の特徴であり観客を魅了してやまない部分である。「ながい黒獅子まつり」は各獅子舞団体の違いを味わう楽しみをもって長井市中心街に観客が集う。このように、この祭りは賑わいづくりと地域振興にも寄与している。「ながい黒獅子まつり」は、個性的で躍動的な長井市近隣の獅子芸能が集結して創出する祭礼文化といえるだろう。

7、まとめ

本稿で述べてきたことを以下に整理してまとめとしたい。

- (1)獅子舞（ムカデ獅子）が野川の龍神（大蛇）伝説と信仰と深く結びついている。
当地域の龍神信仰（水神信仰）とは、野川から農業用水や生活用水に不可欠な水がもたらされている実生活に根ざしたものであり、水への畏れや敬いなどの信仰心が龍（大蛇）のカシラを戴く獅子の芸能を生み出した源泉であるといえよう。
- (2)鎮守の神への奉納の芸能が獅子舞（ムカデ獅子）である。
神社祭礼のときのエネルギーが最大限に発揮されるのが獅子芸能である。それを歓迎する地域の人々や観衆とともに共同体の象徴的祭礼がかたちづくられている。地域コミュニティは、各鎮守の神に奉仕する獅子芸能によって成り立っている側面がみられる。
- (3)草相撲（庶民文化）と獅子舞（ムカデ獅子）が融合している。
獅子をリードする警固役は、鎮守の神社境内の相撲場で若者同士が戦い、そこで勝った者が獅子を統御する大関＝警固となれるのである。いわば神に選ばれた人間が獅子を統御できる能力を有するのである。このような真剣勝負を経たうえで祭りの重要な担い手が決まる伝統的仕組みが残されている。神社と神事相撲と獅子芸能の関係性が明解であり、まさに地域生活に根ざした芸能といえる。
- (4)獅子の黒色カシラから「黒獅子」と称されているが、その黒色とは唐獅子系の伊勢派や熱田派系太神楽の赤色とは異なる獅子舞の歴史性を示している。
黒色系の獅子頭は東北地方では修験山伏の影響を受けた獅子舞に見られることが多く、その修験は主として熊野修験が考えられるのではないかということを仮説として提起した。また時代的には太神楽はおよそ江戸時代に入ってから隆盛しているが、修験系の獅子舞は中世時代に起源をもつ比較的古い芸能であるといえる。長井市および西置賜の獅子舞（ムカデ獅子）の隆盛は江戸時代であろうが、その起源については修験系獅子舞の視点においても検討する必要がある。
- (5)「ながい黒獅子まつり」は獅子芸能が創る祭礼文化として定着しており、地域の賑わいと振興に寄与している。今日的祭りに参画・構成することによって、それぞれの獅子舞（ムカデ獅子）団体が活性化しているともいえよう。

おわりに

各地の芸能団体が集合して大きな祭りを構成している事例として、東北地方では北上市の「北上・みちのく芸能まつり」がある。東北各地からおよそ100組の芸能団体が参加し、毎年8月上旬の3日間北上市駅前の路上で行われている。平成24年度で第51回目を数えたが、半世紀もの間継続している祭りであることにまず驚く。そして、この祭りが約40万人もの観光客を集めて地域の活性化に貢献していることにも注目し

たい。さらにこの祭りのすごさは、後継者難や財源難などで危機的状況にあった民俗芸能を復活させるエネルギーを持っていることである。北上市内の芸能団体は戦後に大部衰退してしまっていたが、133団体のうちの8割が「まつり」後に復活したという（北上市報告）。祭り芸能とは、衰退していたものを蘇生させる大きな力を内在しているということであろう。

長井市の「ながい黒獅子まつり」も「北上・みちのく芸能まつり」のように、息の長い祭りとなって地域振興に貢献し、他地区の民俗芸能の継承・発展を促すようになってほしいと願っている。そのため、微力ながら今後も当地方の獅子舞（ムカデ獅子）の調査・研究を続けて、芸能と祭りの必要性や意義付けをはかっていきたいと思っている。

<注>

- (1) 『長井市史』第1巻原始・古代・中世編 長井市史編纂委員会 1985年
菅 徹次郎『長井郷一の宮 総宮神社縁起』総宮神社獅子舞保存会 2003年
- (2) 武田 正「卯の花姫」『白鷹の昔語り』私家版 1961年、武田 正『置賜の伝説』東北出版企画 1979年
- (3) 『おしっさま』長井の人々12・13合併号 長井市地域文化振興会編 1997年
- (4) 『長井市史』第2巻近世編 長井市編纂委員会 1984年
- (5) 柳貴家正楽『大神楽の世界』水戸大神楽宗家 1998年
- (6) 『獅子頭—東日本を中心に—』町田市博物館 1996年、『獅子頭—西日本を中心に—』町田市博物館 1997年
- (7) 菊地和博・星野 紘「山伏神楽・番楽と地域社会」東北芸術工科大学東北文化研究センター研究報告書 2011年
- (8) 宮家 準『熊野修験』吉川弘文館 1992年
- (9) 『熊野信仰と東北』東北歴史博物館 2006年
- (10) 『宮内熊野の獅子祭り』古典と民俗学の会 白帝社 1988年、黒江太郎著『宮内熊野大社史』熊野文化研究所 1976年
- (11) 『山形県の歴史』山川出版 1998年
- (12) 前掲『長井市史』第1巻